はしがき

いま、ＮＨＫの「クローズアップ現代」をみながらこれを書いています。おなじみの女性アナウンサーが、スケートの金メダリスト、清水宏保選手の筋肉増強法を紹介しています。筋肉の細い繊維を破壊して、それを太い繊維に再生させる―気絶する寸前までみずからの身体を鞭打ってそれを進化させてきたそうです。 破壊と再生、これが進化を支える根元なのでしょうか。本でこんなことを読んだことがあります。最後の氷河期が終わったあと、中東の肥沃三ケ月地帯に現れた野生のヤギクサが突然変異を繰り返して、まずエマー麦に変わり、次にそれがパン麦に変わったそうです。また数百万年前にアフリカに生誕した人類は、幾多の変異を重ねながら新たな遺伝子を獲得し、今ある形に変貌したということです。古いものを壊すか捨てなければ新しいものは得られず、新しいものを得なければ生ける化石となってしまうというわけです。

本誌も、石化するのを防ぐには、年々歳々、脱皮していかなければなりません。いや、脱皮させていかねばならないのです。第３号を編集するにあたり、編集者としてささやかなディコンストラクションを試みました。まず、脚注を廃止しました。これは、経費節減のためですから、明らかに退行進化です。次に、文字を今までよりも濃く、そして肉太にしてもらうように注文を付けました。最終的にどんな仕上がりになるかちょっと心配です。それから、論文のオンライン化にやっと踏み切ることにしました。しかしいちばんの改変は、査読を厳格にしようとしたことです。十分に厳格であったかどうかひとくちではいえませんが、少なくとも没になった原稿もあれば、さんざん書き直しを求められ、没になる寸前に救われたものもあります。これから投稿する人たちは、そうやすやすとは採択されないと覚悟していたほうがいいでしょう。

このような脅迫めいたことをいう私は、これで編集者としての任を終えます。次号からの紙面には、バトンを引き継いでくださる方の構想が反映されることになるでしょう。しかしなんといっても、関係者のみなさんのご支援がなければ構想もなにもあったものではありません。投稿者のみなさんには、力のこもった論文をお寄せくださるようお願いいたします。また読者のみなさんには、本誌をよりよくするための建設的な、あるいは破壊的なご意見をお聞かせくださるようお願いいたします。

2002年２月６日

『言葉と文化』第３号
編集担当　近藤　健二